

## 現象から意味へ

砂子 岳彦

### From Phenomenon to Sense

SUNAKO Takehiko

#### 要旨

フッサールの直観作用に対してレヴィナスは意味作用を提示する。対象と主体を形成する光による方向性が直観作用とすると、意味作用は目指される思考の方向性そのものである。両者の作用を媒介するのは〈顔〉である。本論はフッサールの光による直観作用と語りによるレヴィナスの意味作用を、〈顔〉を媒介とする次元階層として示す。

**キーワード：**現象学、フッサール、レヴィナス

#### Abstract

Lévinas presents sense action to Husserl's intuitive action. When the direction of light that forms the object and subject is an intuition, the meaning is the direction of the intended thought. It is the FACE that mediates the actions of both. This paper presents Husserl's intuitive action of light and Lévinas' semantic action by discourses as a dimensional hierarchy mediated by FACE.

**Keywords:** Phenomenology, Husserl, Lévinas

## 1. 現象的な構造

現象学は諸学の基礎づけを目指したフッサールによって創始された。その現象学が基礎とするのは志向性である。志向性とは「何ものかについての意識 *Bewußtsein von etwas*」である。意識は常に何ものかについてであり、意識自体ではない。この志向性はそれ以上の基礎づけを必要としない。

「何ものかについての意識」である志向性を意味する *intention* の語源が *intendere* (～へ向かっている) であることからそこに方向性が暗示されている。方向性はフランス語の *sens* の意味でもあり、志向性と意味が方向性によってつながる。意味は複数の志向性たちによっても構成されているために志向性は階層的である。フッサールは信憑された意味の手前に遡って志向性を分析し、対象の意味を能動的に構成する「作用志向性 (*Akt-Intentionalität*)」に対して、それに先立つ「作動志向性 (*die fungierende Intentionalität*)」を見いだした。すなわち、意識作用に先立って、すでに匿名で働いてしまっている作用が認められた。フッサールは作用志向性に基づく延長的な意味構成を「能動的総合」、作動志向性に基づく持続的な意味構成 (意味の発生) を「受動的総合」と呼んでいる<sup>1)</sup>。

こうした志向性とその総合に基づく意味の構成は、対象の意味 (「何ものかについての意識」) と同時に、主体が対発生している。すなわち、志向性という方向性の先にあるものもとにあるものがそれである。能動的総合においては自我が、受動的総合においては匿名性の主体 (モナド) が、対象に対する志向性の極として前景化する。もとにあるものが前景化されるとき、志向性はそちらに向けられる。すなわち、「我思う」(コギト的) 主体と「我能う」(モナド的) 主体がそれぞれの総合に連関している。この連関をそれぞれ〈自我-対象〉、〈自己-対象〉と記すことにする。対象<sup>1)</sup>は自我に意味づけられた対象である。すると、双対的な志向性 (対象へと自己へという方向性) が二つの総合 (能動的総合と受動的総合) それぞれに作用していることになる。

メルロ＝ポンティ (1999) は肉の存在論において「可逆性」を究極の原理としているが、双対的な志向性に可逆性をみることができる。見るものと見られるもの、語る言葉と語られるものといった分別は存在を支える構造としての可逆性なのである。双対性を認めるときにもう一つの双対性が派生してしまうという意味では、志向性は二重の双対性として帰結する。二重の双対性 (あるいは双対的共役性) は四つの志向性によって構成される<sup>2)</sup>。

世界とわたしは互いに互いのうちにある。知覚す

ること (*percipere*) から知覚されていること (*percipi*) に向かって、どちらが先行するということはなく、同時性、あるいは〈遅れ〉が存在する。

(メルロ＝ポンティ, 1999)

確かにこれらの意識に現れた事物が妄想であれ、その妄想が現れたことは疑いようがない。その意味で明証的である。この疑いようがない明証性は比喩であること以上に光による現象に依拠している直観作用である。能動的総合に先行する受動的総合において知覚による光の洗礼を受けているのである。発達論的にみても、嬰兒がはじめて目の辺りにする光景は受動的である。現象学にみる二重の双対性におけるこの光の明証性に対して、レヴィナスはさらに現象学的遡及を提示する。

## 2. 意味的な構造

フッサール現象学において、レヴィナスは「超越的なもの (*transcendance*) という観念を仕上げる場合に、フッサールは、オブジェの実在性からではなくて、意味という観念から出発する」(HH:37) としながらも、この観念が意味的なもの、つまり観念的なものから逸脱していったと批判する。

志向性が対象の実在性にひっぱられてしまったというレヴィナスの指摘は、フッサールの明証性へのこだわりに向けられる。フッサール現象学の知覚の明証性に基づく直観作用に対してつぎのようにレヴィナスは語る。

あらゆる志向性は、みずからを探し求める明証であり、みずから生成しようとする光というべきものである。一たとえ感情的であれ、または相対的であれ—すべて志向の基礎には表象があるということ、それは、光をモデルにして、精神的生の全体を思い描くことである。 (HH:41-42)

そしてレヴィナスは、フッサール現象学から意味作用を導く。

欲望とか感情としての限りにおいての—欲望、感情の志向は、この語の狭い意味でのオブジェクティブではない独我的な意味をうちに含んでいる。思考は意味をもつことができ、なにものかを狙うことができるという、あの考え方を哲学の中に導入したのは、フッサールであり、そのなにものか絶対的に規定されておらず、ほとんどオブジェがないということ (*une quasi-absence-d'object*) であるときさえ、

それはそうなのである。(HH:41)

(TI:283)

対象として同一化される光の明証性でなくとも、欲望のように、向かわれる方向性のみとしての意味作用を導入しておきながら、フッサールは明証性にのみこだわってしまったというのがレヴィナスの指摘である。この指摘はそのまま意味作用による現象学の再構築へとつながる。欲望や愛といった意味作用は自己と他者の哲学を要請し、フッサール現象学の絶対的他者性の不在という批判につながる。他者が意識の領域に映る志向性であるかぎり、その意味は自己によって措定されたものでありつづけるが、意味作用がもたらす絶対的他者として隔たる他者との対話に超越を見出す。

被措定項と化した他者に向けられる言葉は他者を内包するかに見える。しかし、そのときすでに、言葉の宛先たる他者は、彼が対話者である限りにおいて、自分を包摂していた被措定項から離れてしまっており、それ故、他者は語られたことの背後から出来せざるをえない。(TI:282)

他者は「あなた」として彼方において、しばしば〈わたし〉の期待を裏切る。そもそも対話は良きにつけ悪きにつけその裏切りのためにある。発語は〈顔〉の背後にある、自分の度量衡を超えた存在に語りかける。レヴィナスは「被措定項としての他者と対話者としての他者との隔たりを示すことによって、言語の形式的構造が告知しているのは、〈他者〉を傷つけることの倫理的不可能性であり、また「ヌミノーゼ」の痕跡を一掃した〈他者〉の聖潔（サントウテ）なのである」(TI:282-283)と述べている。「言語の形式的構造」が依拠するのは自他の隔たりであり、意味作用の場である。確かに自他に隔たった差異がなければ対話は成立しない。その隔たりが「〈他者〉を傷つけることの倫理的不可能性」を担保している。そして、「存在論の次元には倫理的次元が先立つ」(TI:292)としている。

「対話者としての他者との隔たり」は、フッサールの「光をモデルとする」同一性による明証性に対して言葉をモデルとする差異である。

無限の観念のみが〈同〉と〈他〉を関係づけながらも〈同〉に対する〈他〉の外部性を維持するのだ。その結果、〔神の実在に関する〕存在論的論証にも似た論理構成がここに生まれる。つまりこの場合には、存在の外部性がこの存在の本質に刻印されているのである。ただし、このような仕方では論理的推論ではなく、顔という公現である。

レヴィナスは他者を〈顔〉によっても出会わず。顔を「意味の源泉」(TI:440)とみなすことで、存在が人間のあいだで言葉として働くとし、誰の言葉でもないような言葉を棲家とする存在を語るハイデガーの存在論と対峙する。レヴィナスにとって「存在とは外部性であり」(TI:440)、「主観性」はその外部に対する内部性である。存在に対する主観性、他者に対する自我が、「形而上学的連関」(TI:441)として、顔から湧出する意味として浮上する。「〈他〉の他性は〈他〉の自同性から帰結するものではなく、逆に〈他〉の他性のほうが〈他〉の自同性を構成するのであって、それゆえ〈他〉は〈他者〉なのである」(TI:370)という連関は、フッサールの対象化された他者、すなわち自己移入された他我とは異なる次元にある。顔から立ち上がる主観性、そして他性によってたつ〈他者〉が意味の連関をなしているのである。この意味の連関に有責性を持った自我が召喚される。

自分のなしたこと以上の責任を負うという、この有責性の過剰 (débordement de la responsabilité) が生起する場所が宇宙のどこかにありうること、それが畢竟するところ、「私」の定義なのである。(TI:222)

デカルトは方法的懐疑によって「我思う」(コギト)に還元しながら、経験的自我によって「我在り」と帰結させてしまった。疑いようもない疑いに気づきながらも、自我を対象化させてしまったのである。方法的懐疑を徹底させて、フッサールは超越論的自我によってデカルトの自然主義的態度を払拭した。これに対して、責任に応えるという意味では経験的自我が意識的な「選び」によって、もう一度レヴィナスによって呼び戻されたのである。しかし、レヴィナスの自我は、現象学の洗礼を受けて、デカルトのコギトを昇華させた自覚的に責任に応える自我としている。これを「他者」に対して「自者」と呼ぶことにする。

こうして、レヴィナスの「意味の源泉」から、〈主観性—他性〉と〈自者—他者〉という二重の連関が汲み取れる。フッサールの二重の双対性は光に基づいたものだったように、この二重の連関は対話に基づき、それゆえ双方向性をもつという意味で、ここにも二重の双対性が見られるのである。フッサールとレヴィナスの問題圏域は次元階層となっていて、同じ構造でありながら階層が異なっている。「存在論の次元には倫理的次元が先立つ」ためにレヴィナスの階層はフッサールの階層を下支えしている。

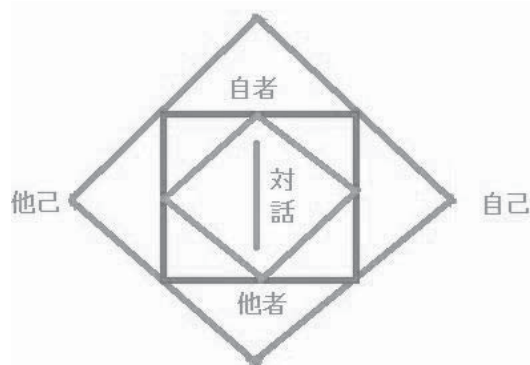


図1 意味的場（内◇）と現象的場（外◇）

### 3. 意味から現象へ

〈顔〉は他者への窓口であり、知覚正面を与える一つの光景でもある。フッサールが顔を見るならばひとつの光であり、レヴィナスが顔を見ると呼びかける言葉の主体となる。顔は自他を媒介すると同時に、意味（声）と現象（光）をも媒介している。

意味的な場 → 〈顔〉 → 現象的な場

レヴィナスによれば〈顔〉とはみえ姿というよりも「語り（呼びかけ）」(discours)である。図は(□で表される)〈顔〉が媒介とする、意味的な場（内がわの◇）と現象的な場（外がわの◇）の関係を示している。「存在論の次元には倫理的次元が先立つ」としても、〈顔〉は光と語りの両義的なものである<sup>3)</sup>。レヴィナスは非対称的な自他の関係から、この両義性は等価なものではないと言うだろう。しかし、メルロ＝ポンティの交叉配列としてこの両義性をとらえるならば、意味的な場と現象的な場が俯瞰的に捉えられ対称的であり、自己側に引き寄せたときに非対称的になると考えることができる。〈顔〉を意味的な場と現象的な場の両義性とするならば、両者を統合によって媒介する一つの場として考えられる。この統合された〈顔〉において、現象的な場の自他と意味的な場にの自他が斜交（直交）の関係にある。すると、光の由来は意味的な場における〈自者－他者〉の「語り」にあることになる。

逆に光から意味を構成する階層次元の転位はできないだろうか。現象的な場における対話が、その次元にない意味（「平和的対立」）を直交成分として意味的場における意味をもたらす。この新たな意味が光の現象的場から意味的な場への階層の転位をもたらすと考えられる。少なくとも自他の対話において、光景から受け取った意味から〈わたし〉は自らの〈顔〉の表情を他者に届けている。

#### 注

- 1) フッサールの「志向性」については、山口一郎の『発生の起源と目的：フッサール「受動的綜合」の研究』、知泉書館（2018）を参考にした。
- 2) メルロ＝ポンティは「二重の交叉」と表現している。
- 3) 〈顔〉の「語り」と見えの両義性を比喩的に考えてみる。たとえば、書家による書は意味作用をもっているながら、直観作用によって芸術性をもっている（図2）。文字の意味がわからない外国人にとっては後者の作用のみが与えられる。



図2 勘亭流の書体

また、「語り」による意味的な場と光による現象的な場をバネの比喻によって示してみよう。バネを伸ばして横から見ると波に見えるが、伸ばしの方から見ると円に見える。バネは見る角度によって二通りの見え方が与えられる。〈顔〉をこのバネに喩えるならば、「語り」による意味作用において波形をなしているが、見え姿による直観作用において円形に見える。

#### 引用文献（頻繁な引用は略号を使った）

- TI: エマニュエル・レヴィナス（著）、合田正人（訳）『全体性と無限』、国文社、2006年  
 HH: エマニュエル・レヴィナス（著）、丸山静（訳）『フッサールとハイデガー』、せりか書房、1988  
 モーリス・メルロ＝ポンティ（著）、中山元（訳）『メルロ＝ポンティコレクション』、筑摩書房、1999年